

田中翠香歌集

『パーエクトワールド』

(角川文化振興財団)

瀬戸夏子著
『をとめよ素晴らしき人生を得よ』

(柏書房)

折々に主体が入れ替わる構成の、異彩を放つ歌集だ。

冒頭では、「雪屋敷千絃」なる人物の作品として、田中翠香の歌が提示される。

重力に選び抜かれて紫陽花へ落ちゆくことを許された雨

次に、考古学者としての歌が続く。巻末の著者略歴に書かれた職業とは違うので、実際の行為をもとにしない想像上の歌として読んだ。

バグダードーハトラ遺跡の旅程表役人の手を思いつ
書く

また、「雪屋敷千絃」の歌としての作品群に入る。

セーターの千の縫い目に千の風受けつつ春の街を歩め
り

そして、シリア内戦を取材する戦場カメラマンの話をも
とにした歌が臨場感を持つて展開する。

もう死んだ乳児であれば瓦礫から引き上げるときか片
手で掴む

さらにこの後も、主体は入れ替わる。構成は既成の概念
からは遠いが、表現面は簡明で定型のリズムの歌が多いた
め、一首一首は読みやすい。ただ時折、言葉が設定を維持
するために働くねばならず、言葉が詩の言葉としての役割
を果たす難しさについて考えさせられた。

(柴田佳美)

近年、文学や芸術において、これまで目立たなか
つた女性たちの連携に光を当てた論評や研究が国内外で盛
んだ。本書も雑誌「女人短歌」(一九四九・九七)に参画
した歌人、例えば大西民子と北沢郁子の友情や、葛原妙子
と森岡貞香との、理解し合いつつ競い合う稀有な関係に着
目し、作品を新たな視点から読み解く。

さらに本書は、女性のみならず男性の歌人や編集者の関
与にも注目し、また海外の作家や詩人という補助線も引き
ながら、この雑誌をめぐる「時代や人間関係のダイナミズ
ム」を捉え直しているところが特徴的だ。

「女人短歌」創設の前夜、すでに男性からも高く評価さ
れていた五島美代子が入会に躊躇いを見せるなど、長沢美津
は「女なら認められない多くの女歌人のために、自分だけ
のことを考えないで仲間入りするのが当然ではないか」と
言ったという。女だけで集まることに対する批判や懷疑への
反論として象徴的な言葉だ。このように女性たちが連携
し、後に続く女性歌人たちのことも見据えて活動した軌跡
は、忘れ去られるべきではないと著者は説く。

早春のレモンに深くナイフ立つるをとめよ素晴らしき
人生を得よ

葛原妙子

現代の「をとめ」たちの活躍に至る道を振り返ることで、
また新たな道も見えてくるのかもしれない。(田中 泉)